

ゲッティンゲン大学留学生の同窓会

— Internationale Alumni —

小川 梨絵

„Expertenseminar für internationale Alumni“ —春の終わり頃、こんなセミナーのパンフレットが、ゲッティンゲン大学から届いた。ゲッティンゲン大学でドイツ文学を専攻した中国・韓国・日本の „Alumni“ 対象の特別セミナーが夏に開催される。私には関係なさそうだと思いつつ読んでみると、最後のページの下の方に小さく「旅費及び滞在費はこちら持ち」と書かれてあるのが目に入った。

関西大学でドイツ語・ドイツ文化を専攻し、1年休学してゲッティンゲン大学に留学したが、卒業後ドイツとは全く縁のない仕事に就いた。習得した語学も何もかも、失われる一方の日々。これは天からの贈り物だ！と、早速ドイツ人の友人に書類作成を手伝ってもらい応募したが、心配であった。もし受かったら、エキスパートのためのセミナーなんて私に理解できるのか。意見を聞かれたら、黙ってうつむくしかない。受かってくれ、いや受かるな、そんな気持ちで数週間。音沙汰が無いので、半分ほっとしたような気持ちであきらめていた頃、「ぜひお越しく下さい」との通知が。一緒に応募した留学仲間の友人にも同様の知らせがあった。これは大人数にまぎれられるかも知れないと期待するも、現実はそう甘くなかった。送られてきた名簿に載っている参加者は、たったの13人。日本人は私と友人を含め3人しかいない。しかも他の参加者はほとんどが「大学教授」「新聞社勤務」など、すごそうな面々だ。私は履歴書に正直に、ドイツ語理解力は中くらいであり、職業は一会社員だと書いたのに。これはよほど応募が少なかったか、運がよかったに違いない。

セミナーのテーマは „Deutschland und die Wende“ —東西ドイツ統一の中での文化や文学の変遷に関して、特別講師の講演や参加者の発表、

ディスカッションなどを通し、比較文化論的に理解を深めようというもの。語学力が乏しいなりに前準備だけはしておこうと思ったが、時間がないので本を一冊と、あとは関大在学中の講義のレジュメを部屋の奥から探し出して読みあさった。興味を持って授業を受けていたテーマなのは幸いだった。やっつけの知識を頭につめこみ、不安と懐かしいドイツへの期待で胸をふくらませつつ、7月、ついに出発一。

日曜日の朝、ゲッティンゲンに到着。用意されたゲッティンゲン一のホテルの部屋に入ると、もろもろのパンフレット、それに「ウェルカムチョコレート」まで準備されていた。VIP待遇に恐縮したが、とにかく明日から始まる恐怖の日々に備え、時差ぼけの私は眠ることにした。

夕方からは、すでに到着している人たちと、歓迎食事会。約束の時間に続々とロビーに集まってくるのは、きちんとした身なりで、学生気分私たちとは違う地位も名誉もありそうな方々だった。私はかなり不安だったが、食事会だからと気楽にいくことにした。

芝生に机と椅子が並べられ、大学関係の偉そうな方々がたくさんいた。話してみるとどなたもとても優しいのだった。彼らはすぐに私の語学力を見抜き、簡単な質問をいろいろとしてくれ、言葉少ない返事から話を広げようとしてくれる。まさに学生に接する先生のようなようだった。食事も豪華でおいしかった。

次の朝は、ひとまず「ゲッティンゲンツアー」。案内されながら町を歩いてみると、いたるところに有名人の足跡があった。ここにはあの学者が住んでいた、あっちの家にはあの学者…という具合に、どの家にも名前と年代を記したプレートがつけられているのだ。留学中は、こんなふうに見上げながら歩いたことはなかったので、その数は思っていた以上に多かった。由緒正しき町なのだと、あらためて感じた。

講堂での開会の挨拶が終わり、植物園にあるカフェレストランでの昼食時、私は世話役のHackstette氏に言ってみた。大学教授でもない、専門家でもない、学生みたいな私がこんなすばらしいセミナーに参加させてもらうのが、何だか申し訳ない…。

「そんなことはない。こうしていろいろな国からの参加者が集まった。それが文化交流なのだから。」それがたとえ気をつけて言ってくださったものにしても、私は少し安心し、専門家でなくとも自分の立場

でものを聞き、考えてみようと思った。

その日の午後から2日目、3日目は、朝から晩までみっちりセミナー漬けだった。東西ドイツの言葉について、映画、詩、文学について……。すばらしい講師を招いての講座、それを受けてのそれぞれの国の立場からの意見。時には時間を延長してまで白熱した議論が続いた。わからないところは伏目がちにやり過ごし、わかる部分だけは大いにうなずいた。ディスカッションが盛り上がる中で発言できず、日本代表（一応）として常にばつの悪い思いをした。

大学の日本語科で教えておられた先生もゲストとして参加しており、これはとても心強かった。曰く、

「他の参加者だって、全部の内容がわかっているわけではないですよ。でもとにかく発言して、話題をそちらへ導くんです」とおっしゃっていた。それにしたって理解の程度はかなり違うだろうとは思いつつ、その積極性は確かに日本人にはあまり無いなあ、としみじみ思った。

最終日の4日目はバスに乗ってベルリンへのエクスカージョン。難しいこと抜きで、観光・おしゃべり・おいしい食事を大いに楽しんだ。語学力の欠落で、思っていることをうまく言えずもどかしい日々だったが、ごはんだけは一人前に食べた。

思い出に残っているのは2日目、バスで郊外へ遠出しての夕食。おいしいドイツ料理をいただき、食後、一人の韓国の大学教授と庭を散歩した。

庭には小高い山があり、その向こうに何があるのだろうかと思ってみたが何もなくて、ただ芝生が広がり、遠くに家が並んでいた。陽が沈みうっすら明るい空は、私の生活圏内では、絶対に見ることができないくらい大きくて広い。私の思うドイツらしい風景。日本の空はこんなに広くない。こんなにたくさんの緑もない。こんなにゆっくりと時間が流れていない…そんなことを私は言ったと思う。彼女も同じだと、韓国では仕事に追いたてられて、こんなにゆっくり時間を過ごすことはないと言った。

もちろん学生と社会人の立場の違いもあるだろうが、ドイツの暮らしはどうだったかと聞かれたら、「自由だった」と私は答える。今回たくさんの方が、それに同意した。それぞれに文化も生活も違う中国・韓国

のもと留学生の多くが、私と同じように考えているのかも知れないと思うと興味深かった。

„Alumni“ という言葉を、私は今回初めて聞いた。「卒業生」というほどの意味らしく、学位取得者も短期留学者も、ゲッティンゲンで半年以上学んだ留学生はすべてAlumniと呼ばれるそうだ。韓国ではAlumniネットワークが広がっており、ゲッティンゲン旅行をしたりもするとの事。存在すら知らないのは、どうやら日本からの参加者だけらしかった。これはとても良い制度だと思う。留学生同士が国に帰ってもつながりを持ち、交流を深め、ゲッティンゲン大学との関係も保ち続けられる。これから留学しようとしている人に最新の情報を提供することもできる——。今回、こんなに良い待遇でドイツに行けたのも、Alumniあってこそだ。

こうして私の体験を発表し、Alumni Göttingenの存在を日本で少しでも広めることができたなら、私がこの度のセミナーに参加し、素晴らしい経験をさせていただいた意味があるのではないだろうか。